

保育士養成課程における授業実践報告

—身体表現と造形表現からの異文化理解へのアプローチ—

内山 須美子¹・齋藤 千明¹

Report on Practical Lessons in a Training Course for Nursery Teachers: Approaches to Intercultural Understanding through Physical Expressions and Plastic Arts

Sumiko Uchiyama¹・Chiaki Saito¹

Abstract

Given the urgent need to train childcare workers who can handle multicultural childcare, intercultural understanding and respect for diversity have become one of the most sought-after specialties of childcare workers. In this study, we look back at lesson designed to promote “intercultural understanding” contained in “Lives and Plays for Children A (Physical Expression)” and “Lives and Plays for Children C (Plastic Arts)” with the goal of organizing tasks for next fiscal year and exploring ways to implement better teaching practices.

The results of the study showed that folk dance can be used as a teaching material to promote intercultural understanding. Additionally, it was observed that cross-curricular group work promoted active learning in learners and that there was a shift in perspective towards a comprehensive view of the realm of expression. Finally, psychological effects like an increase in the awareness of working together toward a common goal, in the feeling of being part of a team, in the sense of belonging as well as in the awareness of one’s own identity were also observed, suggesting the need to continue this initiative.

The following five points were put forth as a method to enrich our classes, in

¹白鷗大学教育学部
e-mail : uchiyama@fc.hakuoh.ac.jp

the future: securing time to study the respective subjects of Physical Expression and Plastic Arts, analyzing the principles of self-expression methods, making comparisons with one's own culture, developing multicultural childcare and the need of a cross-disciplinary curriculum.

1. 緒言

今日、多くの国々において、民族・言語・文化の違い、あるいは性差や障害の有無にかかわらず、互いを尊重しあって暮らしていける共生社会の実現が目指されている。1989年の入管法改正後から、日本の保育・小学校の現場では外国につながる子どもたちが増加しており、2019年の改正入管法の施行を経て、その数は更に増加することが予想されている。また、2016年に発表された中教審答申では、外国につながる子どもの増加とともに、外国につながる子どもの母語の多様化を指摘している。幼稚園教職課程及び保育士養成課程において必修科目となっている英語以外の言語を母語とする子どもが増加していることを鑑みると、保育者にはよりグローバルな視点が求められていると言えるだろう。

このような社会的背景の中、2017年改訂の「保育所保育指針」では、旧指針での「子どもの国籍や文化の違いを認め、互いに尊重する心を育てるようにすること」に、「文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国家、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること」が加筆された。外国籍の子どもと日本人の子どもが共に多様な文化に触れながら成長する互恵性に根差した保育が求められていると言えるだろう。「多文化共生保育」あるいは「多文化保育」¹⁾に対応できる保育者養成は急務であり、「異文化理解」は保育者に求められる専門性の一つとなってきたと考えられる。

こうしたことを踏まえると、保育者となり現場に出る以前の保育者養

成の段階から、異文化に対する理解力²⁾の涵養という視点が必要だと推測される。実際、こうした試みは少なくないが、その中のひとつに岩本ら(2022)の異文化間教育があげられる。「ホンモノ(人や物)を通して異文化と出会う学びの場を、教育現場でいかにつくりあげるか」をコンセプトに、体験を通じた学びの意義と手法を紹介している。本研究では、こうした先行研究に学びながら、著者らが担当する「子どもの生活と遊びA(身体表現)」と「子どもの生活と遊びC(造形表現)」で行った、学生の異文化理解を促すための取り組みを通して、保育士を目指す学生がどのような学びをしたかを振り返り、次年度に向けた課題を整理し、より良い授業実践のあり方を探ることを目的とした。

2. 授業の成果と課題

2.1. 子どもの生活と遊びA(身体表現)

2.1.1. 授業構成

(1) グループ構成

8人組(または7人組)×4グループ

(2) 授業実施日

第2、3、4回授業(全15回授業)

※月曜日4限開講授業:10月2日・16日・23日

※水曜日2限開講授業:10月4日・11日・18日

(3) 全3時間の内容

1時間目:調べ学習(国や国の歴史について・ダンスの由来など)

2時間目:踊りの練習および振りのアレンジと創作

3時間目:発表(衣装着用/調べ学習内容とダンスの発表)

月曜日4限開講授業→10月23日

水曜日2限開講授業→10月18日

※発表時の衣装は「子どもの生活と遊びC」の授業で制作

※第1回授業が開始されるまでに、下記10曲の中から各チームで1曲

を選択し、踊り方の動画を見ておくように指示した。

タタロチカ（ロシア）	ミザルー（ギリシア）
オスロワルツ（イギリス）	タンゴミクサー（アメリカ）
ドードレブス・ポルカ（チェコ）	グスタフススコール（スウェーデン）
エースオブダイヤモンド（デンマーク）	キンダーポルカ（ドイツ）
マイムマイム（イスラエル）	南中ソーラン（日本）

①1時間目：調べ学習（国や国の歴史について・ダンスの由来など）

まず、幼稚園教育要領、保育所保育指針内の文章を示し、個々の幼児の実態に応じた指導内容や指導方法の工夫が求められていることを説明するとともに、日本での在留外国人の増加、就学前の子どもの数や国籍に関するデータを示した。そして、「多様性への理解は時代の要請であり、これからの幼児教育のキーワードのひとつであることから、フォークダンスと衣装制作を通して他国の文化に関心を持ち理解を示すこと（異文化理解）」を授業のねらいとして伝えた。その後、各グループで選んだフォークダンスの「国や国の歴史、ダンスの由来他」について自由に調べさせ、チームで一冊の発表用レジュメを作成させた。

②2時間目：ダンスの練習および振りのアレンジと創作

各チームで踊り方を調べて、その通りに踊れるように練習させた（マスター部分）。ある程度、踊り方をマスターした後、そのダンスのイメージを壊さないように、使われているステップ、組み方、隊形等に工夫を凝らして自由に創作をさせた（創作部分）。フォークダンスは一続きのダンスが何回か繰り返されるので、マスター部分と創作部分をつなげて1曲にするように指示した。

③3時間目：発表（衣装着用／調べ学習内容とダンスの発表）

発表時には、「子どもの生活と遊びC（造形表現）」で制作した衣装を身に付け、各チームで調べた「国や国の歴史、ダンスの由来、衣装についての説明等」のレジュメをクラス全員に配布して説明させた後、ダンスの発表を行わせた。

2.1.2. 調査内容

(1) 調査対象者

令和5年度白鷗大学教育学部「子どもの生活と遊びA」受講者59名を調査対象者とした。最終的な分析対象者は59名（月曜日4限27名、水曜日2限32名／男性2名、女性57名）であった。

(2) 調査内容

①基本的な属性

対象者の属性として、クラス、性別を尋ねた。

②授業での「学び」に関する調査項目

対象者に、授業のふり返りを行ってもらい、自由記述による回答を求めた。質問文は、「今回の『ダンス』の授業を振り返って、「あなたが学んだこと（または、得られたこと、気づいたこと）」を1つ、“今回の授業で・・・”に続くような箇条書きで具体的にあげてください。」と指示した。

(3) 調査方法

3回目の授業終了後に、「授業での学びについての調査」と題したアンケートをグーグルフォームにて配布し対象者に回答させた。回答時間は10分程度であった。

(4) 分析方法

授業での学びについての文字テキストデータ（自由記述）は、KH coderを用い、以下の手順にて実行した。まず、複数回に亘って読み込みを行い、文意を変えないように注意して、綴り間違い、入力ミスなどの修正を行った。続いてキーワード抽出（形態素解析）を行った。この結果を確認し、不統一な表現については類義語辞書に登録することでまとめ、それを反映して抽出されたキーワードを用いて共起分析とコレスポネンス分析を行った。

2.1.3. 結果：授業での学生の「学び」についての分析

(1) 共変関係

キーワードの出現頻度と共変関係（同時に出現する関係）について図示化を試みた。キーワードの○の大きさが出現頻度を表し、キーワードを結ぶ線の太さが同時に現れる回数の多さを表している。ここでは、キーワード抽出で得られた出現率30%以上のキーワードのwebグラフを作成し、図1に示した。グラフには共通する回答5以上の線を表示した。

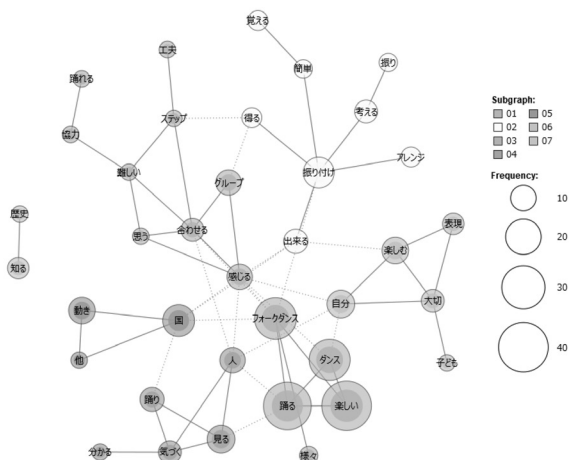


図1. 共起ネットワーク図

共起分析の結果、授業における「学び」について、以下の7つのグループが得られた。

1) 03: ポジティブ感情

非常に大きな円で構成されている03に着目してみると、「踊る」「楽しい」を中心に「ダンス」「フォークダンス」「様々」といった単語がつながっており、本共起関係を「ポジティブ感情」と命名した。具体的な回答例は以下の通りである。

- みんなで同じ振付を踊るのが楽しい。
- ダンスのアレンジを考えて踊るのが楽しい。
- 各グループの踊りを見るのが楽しい。
- 様々な国の踊りを知ることができて楽しかった。

2) 01: ユニゾン:

01に着目してみると、「グループ」「合わせる」「感じる」を中心に「思う」「難しい」「ステップ」「協力」「工夫」「踊れる」といった単語がつながっており、本共起関係を「ユニゾン」と命名した。具体的な回答例は以下の通りである。

- グループで協力して合わせることは難しいけれど大切である。
- 他の人と動きやテンポを合わせるのが難しいと感じた。
- フォークダンスはみんなで息を合わせて踊る振り付けが多いため、グループの人との一体感を感じる事が出来た。
- ステップやタイミングを合わせて踊ることで、相手やグループのみんなとの協力をし、絆が深まる。

3) 02: アレンジ

02に着目してみると、「振り付け」を中心に「アレンジ」「出来る」「得る」「考える」「振り」「簡単」「覚える」といった単語がつながっており、本共起関係を「アレンジ」と命名した。具体的な回答例は以下の通りである。

- 自分たち独自で振り付けを行い、ダンスの楽しさやそれぞれの国の違いを意識しながら発表に臨んだ。
- もとのダンスを自由にアレンジして振り付けを考えることが楽しかった。
- フォークダンスは振り付けが簡単なのですぐ覚えることができ、それ故にアレンジも加えやすくてとても楽しい。話し合いを基に作ると愛着を持って踊ることが出来ると学んだ。
- 元々の振り付けで踊るだけでなく、オリジナリティーのある振り付けを作りフォークダンスの曲で踊ることも非常に楽しいと学んだ。

4) 04：見る

04に着目してみると、「見る」を中心に「人」「気づく」「踊り」「分かる」といった単語がつながっており、本共起関係を「見る」と命名した。具体的な回答例は以下の通りである。

- みんなで踊ったり、踊りを見たりする楽しさを学んだ。
- 見ている側もとても楽しくて、踊っている側も見ている側も楽しめるということに気づくことができた。
- いろんな国のフォークダンスを見て、私が想像していたフォークダンスではないものもあって見ていて面白かったです。
- 自分だけではなく、見てる人も楽しいと思えるダンスを考える（第三者目線になる）ことが大切だと学びました。

5) 06：自分の表現

06に着目してみると、「自分」を中心に「表現」「楽しむ」「大切」「子ども」といった単語がつながっており、本共起関係を「自分の表現」と命名した。具体的な回答例は以下の通りである。

- 創作する際に、先生が自由な表現を褒めてくれて自分が保育者として子どもたちに接する際も子どもの自由な表現を尊重できるようにすることが大切だと学んだ。

- 自分たち自身が楽しんでダンスを踊って表現することが大切であると学んだ。
- 自分達の振り付けの工夫で子ども達でも簡単にダンスができるようになることなど様々な学びを得ることができた。
- ダンスは恥ずかしさもあるけど、自分を表現することを楽しむことができたらいいと思う。

6) 05：国のイメージと動き

05に着目してみると、「国」を中心に「動き」「他」といった単語がつながっており、本共起関係を「国のイメージと動き」と命名した。具体的な回答例は以下の通りである。

- 他の国の特徴、フォークダンス、動きやステップを学ぶことができた。
- 国ごとに踊りが存在していること、国によって曲調や動きや振付が異なることに気づいた。
- フォークダンスが踊られる理由や動きについての意味を知ることが出来た。国の状況や歴史を知ることによってこの踊りにはどんな意味が込められているのかがわかった。
- 自分たちの良さも感じながら、他の国の良さもわかるよい経験となりました。
- ダンスを通して、他の国の歴史や文化などダンス以外のことも知ることができ、新しい知識を得ることが出来た。

7) 07：国の歴史

07に着目してみると、「知る」と「歴史」という単語がつながっており、また多くの場合、「歴史」が「国」の係り受けワードになっていることから、本共起関係を「国の歴史」と命名した。具体的な回答例は以下の通りである。

- 国の状況や歴史を知ることによって、フォークダンスが踊られる理由や動きについての意味を知ることができた。この踊りにはどんな意味が

あつて、いつ踊られるのかを知ることができた。

- 国の歴史と踊りが結びついていることに気が付いた。
- フォークダンスの楽しさと国々の歴史について知ることができた。
- ダンスを通して、他の国の歴史や文化など、ダンス以外のことも知ることができ、新しい知識を得ることができました。

以上の共起ネットワーク分析結果は、フォークダンスが、楽しみながら異文化理解を促す教材であることを示唆していると言えるだろう。具体的には、「踊る、創る、見る、知る」という4点からダンスの楽しさを感じ得ており、ダンスのステップや動きから国のイメージを想起し、国の歴史と踊りが結びついていることを認識した学習者の様相が見てとれる。

(2) コレスポンド分析

テキストマイニングしたデータを01型（そのキーワードがあれば1、なければ0）で表し、第2次元までを抽出して布置図を作成した。イナーシャの寄与率から、第2次元までで元のデータの21.8%を説明していることがわかる。結果を図2に示した。

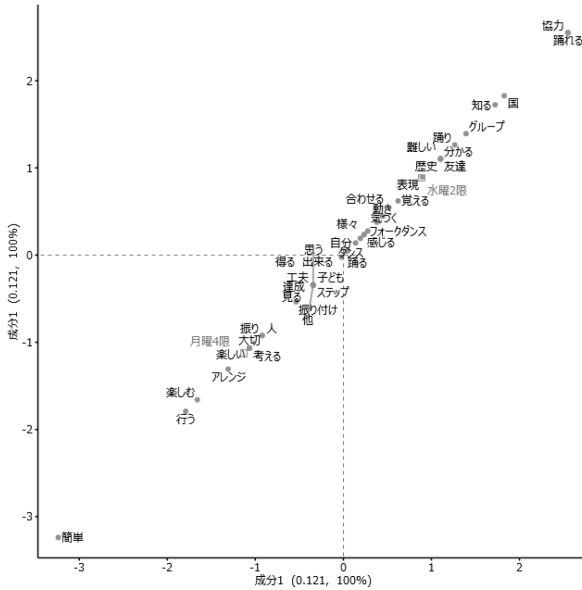


図2. コレスポネンス分析結果

以上のコレスポネンス分析結果は、月曜4限の学生たちは、踊りを踊ったり、振り付けのアレンジを考えたり、他のチームのダンスを見たりして、ダンスに対するポジティブ感情を得ていたことが特徴的であり、一方、水曜2限の学生たちは、ポジティブ感情を得ながらも複数人で踊りを合わせることに難しく感じ、踊りによって国や国の歴史を感じたことが印象に残っていることを示している。異文化理解という点では、水曜2限の受講者の方が学びを深めた可能性がある。調べ学習の発表内容を比較すると、月曜4限は、「踊り方、ステップ、踊りの由来」にとどまっていたのに対し、水曜2限は「踊り方、ステップ、踊りの由来、観光名所、特徴的な食べ物、名物、恋愛観、有名人、政治の在り方、性別感、女性に対する考え方」など、分量的に多く、内容的にも多岐に亘っていた。このことから、異文化理解を深めるためには、調べ学習にも多くの時間を割いて、様々な角度から調べるように示唆することが有効であると推測する。

2.1.4. 総括：成果と課題

フォークダンスが学習者が楽しみながら異文化理解を促す教材となり得ることが示されたことは、本研究の大きな成果である。しかしながら、調査結果から、学習者は国ごとのフォークダンスや踊り方があり、そのダンスが国の歴史や文化を反映しているということは理解したものの、各国のフォークダンスを構成する動きや踊り方の原理を理解するまでには至らなかったと思われる。例えば、ドイツのフォークダンスは職業に関するギルドダンスが盛んであり、靴屋、炭鉱夫、鍛冶屋の踊りなど、それぞれの仕事ぶりを表す動作がモチーフとなっている（日本フォークダンス連盟、2001、p.6）。この原理を理解していれば、仕事の動作をアレンジしてオリジナルな動きを創作することができる。また、スペイン支配による時代が長かったメキシコは、マヤ・アステカ王国より引き継がれる力強い踊りをスペインの踊りとうまく融合させ、16世紀以降には黒人がもたらしたアフリカ音楽のリズムの影響もあり、世界でも有数の踊りの文化を築きあげている（上掲書、p.9）。ダンスから感じられる情熱や迫力はどのようなステップや動きで表現されているのか、その原理がわかれば、その国のイメージを表現するダンスを創作することも可能だろう。原理を知り応用することができれば、その国の文化をより一層深く理解することができる。今回、多くの時間は踊り方のマスターに費やされたが、今後は、ステップや振り付け、フォーメーションを深く分析する時間を確保したい。また、異文化理解と言うからには、自国の文化について理解していることが前提になる。日本各地に根付く郷土の踊りも教材として含める必要があるだろう。

一方、保育士養成課程の学生のこうした異文化理解を多文化共生保育につなげるためには、将来、保育者になったことを想定させること、ダンスの楽しさや異文化についての知識を実際の保育につなげられる力量を養成する必要がある。実際の保育を想定させるためには、「自分ごと」として捉えられるよう、彼らの小中高校時代の外国につながる子どもとの経験に

ついて事前調査をした上で、その結果を共有させ、自分達の実験の経験について考えたり話し合う時間を持つことで、異文化理解ということがより身近に感じられるだろう。その後、保育を行うクラス内に外国につながる子どもがいることを想定した指導案作成や、主活動で使う保育教材の作成をさせることが有効だと考える。

また、異文化や多様性への理解を深めるこうした取り組みの最終目標は、学生の価値感や考え方の変容であり、こうした変容を起こすためには、様々な分野とクロスオーバーすることが望ましいと考えられる。今回「子どもの生活と遊びC（造形表現）」の授業の中で、色や形によって国や民族、個性の表現ができることを学んだことで、フォークダンスを学ぶだけでは叶えられない学びの深まりが見られた。音楽の授業とクロスオーバーすることができれば、曲調やメロディなどの観点から異文化理解が深まることが推測される。言葉の授業とのクロスオーバーも有効だろう。さらに、課程の授業に止まらず、本学の留学生や外部講師、保育現場との交流の機会を設けることも、より一層の異文化理解につながると考えられる。

2.2. 子どもの生活と遊びC（造形表現）

2.2.1. 造形表現の目的

表現は心の内側から外側に向けて何らかの形で表出させたいという欲求から起り、乳幼児期の笑う、むずがる、泣く、怒るなどの感情の表出は自ら表現することの萌芽である。その表出された事象を保育者が受容し応えるという相互的な交流を重ねることで子どもたちは伝達するための表現方法を獲得する。さらに運動機能の発達に伴い拡張されてゆく生活圏内で様々なものに触れてその感覚を味わい、表現に必要な身体感覚を豊かにしていく。

造形表現は、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の5つの感覚に加え、第六感と言われるようなインスピレーション（なんとなくそう思う、感じるといった直感的な感覚）も含めて総合的に知覚したものを様々な物質からな

る素材を用いて形あるものに作り上げる行為である。子どもたちが生活の中で能動的・主体的に対象と関わり、それらを具現化したいという欲求のもと自由に表現できることが重要であり、そのための環境整備および表現活動に対する受容とサポートが保育者に求められる。

子どもの生活と遊びC（造形表現）の授業では、保育所保育指針に示される保育の内容を理解した上で、保育における教材等の作成と活用や、保育環境の構成及び具体的展開のための技術を習得することを到達目標としている。

科目レベルは、音楽表現と造形表現のそれぞれからアプローチし総合的な表現活動を試みる表現領域の基礎科目「保育内容（表現）」及び、造形素材・画材類の素材の特性と表現技法の基礎を取り扱う「造形1」を履修前提科目としており、子どもの生活と遊びを豊かに展開するために必要な知識や技術を実践的に学修する演習科目である。

特に領域「表現」では、身体、造形、音楽を主体とした言語を介さない感覚的な活動、ノンバーバルコミュニケーションを発端とした保育展開が可能であり、多文化共生、異文化理解についての配慮に繋げる試みとして、子どもの生活と遊びA（身体表現）と子どもの生活と遊びC（造形表現）でフォークダンス（民踊）をテーマにしたクロスカリキュラムを実施した。

2.2.2. 造形表現の教授内容について

幼児造形教育においては、感覚の発達とともに総合的な表現力を育むために子どもたちの環境と多様な表現との連結が不可欠である。このため、自然観察やフィールドワークを通して植物や土、石、環境音などを造形素材として活用するなど、素材から着想を得た創造性・表現力を伸ばす取り組みが行われている。前年度までの授業では、初回に実践例としてレジョ・エミリア・アプローチ³⁾やアーティスト主導による美術館や社会福祉施設等で広く実施される造形ワークショップの内容を紹介するとともに、環境芸術（Environmental art）・ランドアート（Land art）⁴⁾、その他

課題テーマに関連した現代美術作品の多様な表現手法を解説した上で、第2週目より制作演習に入った。

15回の授業は、ガイダンスと最後の発表とまとめて2回、課題制作は、90分×3回で1課題とし、

【色彩をテーマとした2課題】①環境音からの色と形をイメージして描画で表す活動「音を描く」②植物採取から草木染めを行う「染色表現」

【風や匂い、光や影など物質的な形状を持たない抽象的な対象をモチーフとして立体・空間で表す2課題】③「風を見る試み・風の具現化」④「光と影の造形」

をグループワークで取り組んでいた。しかしながら科目単独では、多文化保育の観点から保育者に求められる造形表現の理解と援助の方法に関する具体的な保育内容の教授が限定的であった。

子どもたちが自身のアイデンティティや文化的背景を肯定し自由に表現するためには、保育者の広い視点と柔軟性、適応力が求められる。

- 1) 教科横断型の総合的、包括的なアプローチを取ることで領域表現の関係性について理解が深まったか。
- 2) 多文化保育について主体的に考える演習課題のテーマとして有効であるか。

造形表現の授業内容を総括して次年度の演習の進め方を検討する。

2.2.3. 授業構成

全15回の授業で色彩をテーマとした2課題、立体・空間で表す2課題の4課題を制作するシラバスに示した演習テーマおよび造形表現の素材・技法の変更はせず、②植物採取から草木染めを行う「染色表現」の課題制作において、民族と色の文化をテーマに宗教や信仰の色、顔料や染料となる土や植物などの自然素材そして伝統的な色彩表現などの講義を含めて多文化共生、異文化理解へのアプローチを新たに試みた。

(1) グループ構成

子どもの生活と遊びA（身体表現）とC（造形表現）の両授業で同一のグループ構成

* 火曜日1限：31名（内山担当：水曜日2限クラス）

A：タタロチカ（8名） B：ドードレプス・ポルカ（8名） C：オスロワルツ（8名）

D：グスタフススコール（7名）

* 火曜日4限：27名（内山担当：月曜日4限クラス）

E：タタロチカ（9名） F：ドードレプス・ポルカ（9名） G：エースオブダイヤモンド（9名）

(2) 授業実施日

第1、2、3、4回授業（全15回）9月26日・10月3日・10日・17日

(3) 全4回の内容

1時間目：授業ガイダンス、課題の説明と事前準備について（造形素材の準備等）

2時間目：課題曲に関連して調べた内容をもとに情報を色や形、造形的イメージに変換し、衣装デザインについて考える。

3時間目：衣装制作

4時間目：衣装制作完成

2.2.4. 演習授業の内容

①1時間目：授業ガイダンス（2023年9月23日実施）

子どもの生活と遊びC（造形表現）の初回授業のため、他の演習課題を含め全体的な説明を行った後に、演習課題1となるフォークダンスのクロスカリキュラムの進め方と次回の授業までの予習内容、制作のための準備について説明を行った。

内山担当の初回授業でグループ編成と課題曲選定、課題曲に対する調べ学習を行うため、ここでは、第2回授業受講までの準備内容を伝える。

衣装制作での課題条件は次の3点である。

- 1、衣装素材は、白のTシャツを基本素材とし、各自で第2回目の授業までに準備する。
- 2、制作は、ダンスチームとして着用する同系で統一感のあるユニフォーム（uniform）を意識し、選択した課題曲に適したデザインテーマを考え制作する。
- 3、保育現場で子どもと共に創作活動を行う事を前提する。

1時間目授業後半では、民族と色の文化をテーマに土性顔料など洞窟壁画など古来より使用されてきた天然顔料（黄土、赤土、白土、墨）と植物染料による色彩表現について解説し、幼児造形で用いる基本的な染色素材として、園庭や地域産の土で染める泥染や蓼藍、マリーゴールドを用いた草木染めの実践例を示した。

②2時間目：衣装デザインの決定（2023年10月3日）

授業導入では、1回目授業で扱った色彩表現の補足として同型、同系のもので着用することで仲間意識や連帯感が生まれるユニフォーム効果についてと色が人に与える心理的・生理的・感情的・文化的影響について説明後にグループワークとなる。

1限目クラス、4限目クラスとも内山担当第1回目身体表現の授業で課題曲を決定し、曲に関してレポートをまとめているため、資料をもとにスムーズに衣装制作のグループワークに入ることが出来た。また、素材準備においても工夫が見られた。基本素材のTシャツでは、長袖を選択したチームやサイズをXXL～4X Lと意図的に大きなサイズにするなど初めから素材として幅広く応用できるように準備しており、課題曲決定からのその楽曲について調べる中で衣装デザインの方向性についてチームで意見交換が成されていたと思われる。

選択した課題曲に対しての調べ方は、2クラスで大きな違いが見えた。火曜1限（内山水曜2限）のクラスでは、国の概要、歴史と文化、課題曲

の内容に加え、観光や食事、現在の流行や恋愛観、生息する動物など多方面に渡り、それぞれが気になった分野の情報を資料として集めたA4用紙レポート10枚前後のボリュームに対し、火曜4限（内山月曜4限）のチームは、A4用紙裏表1枚に国の概要と歴史、文化、ダンスの由来について簡潔にまとめたもので分量に大きな差があった。

しかし、どちらのクラスも授業内に衣装デザインのおおよそのイメージが決定し、授業後半ではすでにTシャツの加工、染色技法の検討及び材料準備に入っている。この時点では2クラスの違いは認められない。

③3時間目：衣装制作（2023年10月10日）

2クラスともチーム内で作業分担をして衣装制作を進めた。基本素材のTシャツの型はそのまま染色や他素材で簡単に装飾を施すような基本的な作り方を想定したが4限クラス（内山：月曜4限）の課題曲エースオブダイヤモンド（デンマーク）を選択したチームでは、Tシャツを大胆に分解し、新たにマントや女性用のヘッドドレス（頭巾）、アームカバーなど素材を最大限活かす独創的発想の制作が見られた。（写真1）同クラスのドードレブス・ポルカのチームは、袖を切りベストに作り変えている。女性の衣装は身頃に切れ込みを入れてフリンジを作りダンスの動きで揺れるように加工を施し、男性の衣装は切り取った袖で帽子を作るなど両チームとも限られた素材を最大限活用し男性と女性で組んで踊るダンスの動き、見せ方を考慮して衣装に変化をつけていた。（写真2）また、タタロチカのチームは、白いTシャツにリボンやフェルト製の造花を作り、立体的装飾を施しているが、縫い付けた装飾を外すと通常着用できる長袖のTシャツに戻るように素材には彩色等直接の加工は施さず、保育現場での素材応用、再利用もテーマとしていた。（写真3）



(写真1) エースオブダイヤモンド (齋藤担当：火曜4限フォークダンス衣装)



(写真2) ドードレブス・ポルカ (齋藤担当：火曜4限フォークダンス衣装)



(写真3) タタロチカ (齋藤担当：火曜4限フォークダンス衣装)



2クラスを比較すると4限クラス(内山：月曜4限)は、造形表現を主体として身体表現へつなげる活動に対して、1限クラス(内山：水曜2限)では、課題曲の解釈、音楽から発想を広げている。火曜1限(内山水曜2限)の4チームは、民族衣装の表層的模倣ではなく、地域の伝承文化、環境などから着想し、色や形でどのように表すか、表現するためのリサーチによって深く学修し、コミュニケーションの手段としてのデザインを捉えており、異文化理解という観点では学修が深い。(写真4)(写真5)(写真6)(写真7)



(写真4) タタロチカ (齋藤担当：火曜1限フォークダンス衣装)



(写真5) ドードレプス・ポルカ (齋藤担当：火曜限フォークダンス衣装)



(写真6) オスローワルツ (齋藤担当：火曜1限フォークダンス衣装)



(写真7) グスタフスコール (齋藤担当：火曜1限フォークダンス衣装)

学生の造形活動のアプローチを観察した結果、調べ学習の導入方法の検討が今後の課題であり、身体表現とのクロスプログラムにおいては、その

内容と連携が重要である。

④ 4時間目：衣装制作完成・確認（2023年10月17日）

3時間目に続き授業前半の60分は衣装制作、後半30分で完成した衣装のプレゼンテーションと意見交換を行い、次週のダンス発表に向けてチームで衣装準備の最終確認をした。

（ダンス発表の準備として予習復習時間120分程度）

フォークダンスの成績評価は、学期末に提出する他の課題制作を含めたレポートに含む。

⑤ 子どもの生活と遊びC（造形表現）のまとめ・発表

15回目の授業では、Webclassにアップロードされたダンスの発表動画（内山担当授業の動画資料）を改めて視聴し、以下の6項目の内容を含めて授業まとめの発表を行った。

- ① 曲を聴いて最初に感じた『曲』のイメージ。
- ② 課題曲について文化、環境等を調べた結果、分かったこと、最初に聴いた曲の印象から変化はあったか。リサーチした内容から衣装を作るためのモチーフ、アイデアとなったこと。
- ③ 衣装制作のグループワークで工夫したこと。
- ④ フォークダンスを披露して感じたこと、考えたこと。
- ⑤ 子どもたちとの活動、保育にどのように取り入れると良いか。
- ⑥ 造形表現（衣装作り）から身体表現（ダンス）に繋げるこの活動について演習を通してどのような学修があったか。

音楽表現については、ダンスで一体感を味わうことを目的としたフォークダンスの音楽は、規則的なテンポやリズムで、明るく楽しい雰囲気を持つメロディーが多く地域の文化を反映して伝統的な楽器を用いて演奏されることもある。フォークダンスの伝承された背景や環境、様々な情報を得て文化の多様性を自ら体験的に学ぶことが、多文化理解の契機となり得ると

学生自身も創作活動全体を客観的に分析しており、特に⑤、⑥の内容では、保育士として表現の領域を総合的に捉える視点が見られた。

2.2.5. 総括と課題

表現領域（身体表現＋造形表現）でのクロスカリキュラムは、保育学生にとって多文化理解のための基礎的演習の段階である。八桁ら（2019）が言及するように保育士養成においては、これまでの保育者理念を転換し、子どもたちが文化的差異に対する葛藤や戸惑いに直面した際に適切にコミュニケーションを取れるように導くことが重要であり、多文化教育を担う保育者はマイノリティの幼児やその保護者が主流集団に属する日本人幼児や教員・保育者によって理解されるという固定的関係性ではなく、相互的に理解を深めていくべきである。

日本の造形教育では多文化理解を図る教材として示されている内容は、工芸分野で断片的に扱うだけで、箕輪（2017）は「外国につながる幼児」に対しては、日本語指導を中心とした適応教育が強調され彼らのアイデンティティ形成を支える母文化を学ぶ取り組みや主流派の日本人幼児が共存に必要な意識や態度をいかに育むかという視点が希薄であると指摘している。

異文化理解のためにフォークダンスを教材として取り扱う場合、ダンスの衣装制作では、民族衣装の表層的模倣やステレオタイプの固定化にならぬようにフォークダンスが伝承されてきた環境、歴史、文化、信仰など民族の文化を多角的に捉える事前学習を促すとともに民族的表現について講義内容の充実を図る必要がある。

箕輪（2017）が指摘した文化的背景の考慮に欠ける子どもの造形活動教材としてトイレット・ペーパーの芯を使った「トーテム・ポール」作りについては、現在でも手作り保育教材を紹介するWebサイトで簡単にできる子どもの造形活動の一例として紹介されている。トーテム・ポールがネイティブ・アメリカンの人々にとってどのような意味をもつのかを理解

しようとせず、ただ形式的に模倣することは、その文化の軽視に他ならず自分の属する文化ではない文化の「真似事」をする行為、「文化の盗用 (Cultural Appropriation)」と批判を浴びることがあり、侮辱行為に繋がりがねない。また、本来捨てられるはずの廃材、トイレット・ペーパーの芯という、排泄物を想起させるような素材を利用していることも、批判される要因であるとの見解は、同意できるものである。

幼児が自由に加工できる素材は限られており、紙皿、紙コップ、牛乳パック、その他リサイクル素材を使用して短時間の活動で完成できる工作は便利ではある。しかし、題材のテーマ、教育的意図、素材選択について特段考慮することなく、加工の利便性とコストだけでWebサイトの作例をそのまま模倣する学生の指向については懸念するところであり、今後の指導課題である。

次年度の授業では、今回課題内容に提起できなかつた「文化の盗用 (Cultural Appropriation)」についても触れ、幼児造形保育・教育を多文化的に捉えた授業展開、クロスカリキュラムの質の向上を図る。

3. 結論

多文化共生保育に対応できる保育者養成は急務であり、異文化理解や多様性の尊重が保育者に求められる専門性の一つとなってきたことから、本研究では、「子どもの生活と遊びA (身体表現)」と「子どもの生活と遊びC (造形表現)」で行った「異文化理解」を促すための授業内容を振り返り、次年度に向けた課題を整理し、より良い授業実践のあり方を探ることを目的とした。

考察の結果、フォークダンスは異文化理解を促す教材となり得ることが示された。また、教科横断のグループワークにより学習者のアクティブラーニングが促進され、表現領域を総合的に捉える視点への変化が見られた。さらに、共通目標に向かって協力する意識、チームの一員であることの実感や所属意識を高め、自身のアイデンティティーを意識する心理的効

果が得られ、今回の取り組みを継続することの必要性が示唆された。

今後、充実した授業内容にするための課題として、身体表現と造形表現それぞれの教科での調査・学習時間の確保、表現方法の原理的な分析、自国文化との比較、多文化共生保育への展開、異分野との横断的カリキュラムの必要性の5点が挙げられた。

注

- 1) 保育所保育指針の解説では「多文化共生の保育」、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の解説では「多文化共生の教育」の表記で記載され、また、類似の概念に「民族保育」「異文化間教育」などがあり、これらの概念には一定の定義が確立していない現状があるが、卜田(2012)に従って、「多文化共生保育」を「民族や国籍など様々な違いを認め合い、多文化という状況を共に生きるための力を育む保育」と定義したい。一方、「多文化保育」の概念は、「地球市民の育成というグローバルな視点からニューカマー・オールドカマーを問わず、在日の日本語を母語としない幼児・保護者と日本人の幼児・保護者とが幼児の成長・発達の権利と原則を共有することの必要な視点、そして相互に理解し、学びあい、支援しあう、いわば幼児の視点からの統合性の意味を含んでいる」(萩原、2008)のである。
- 2) 白石(2021)は、日本の保育者養成校396校の5分の1以上が多文化共生保育に関連した内容を取り上げていない可能性を示し、多文化共生保育は保育者を養成する上で必ず教授すべき内容とは位置づけられていないことを懸念している。さらに、山本(2016)は、保育者養成課程において多文化共生保育を学ぶことの必要性を指摘している。
- 3) レッジョ・エミリア・アプローチ(Reggio Emilia Approach)イタリアのレジジョ・エミリア市で生まれた教育アプローチ。子どもの興味、関心を尊重し、自発的な学び、表現活動を促すための環境を整え、造形美術の専門教師アトリエスタと教育学の専門家ペタゴジスタを配置し、教師、家族、地域社会が協力して子どもたちの活動を支援する。子どもの成長過程をより深く理解しそれに基づいた教育活動を展開するためのドキュメンテーション作成とリフレクションによる学びのプロセスを重視している。
- 4) 自然を直接の制作素材として表現する環境芸術(Environmental art)・ランドアート(Land art)の代表的な作家、作例としてR. スミソン、M. ハイザーを解説。

文献

- ・萩原元昭(2008)多文化保育論. 学文社.
- ・岩本貴永・清水貴恵・石塚美枝(2022)ワークショップでつくる異文化間教育—ホンモノが生み出す学びの意義と可能性. 論創社.
- ・箕輪佳奈恵(2017)多文化美術教育をめぐる今日の課題：文化学習としての機能を中

心に. 芸術研究報=Bulletin of Faculty of Art and Design, University of Tsukuba/筑波大学芸術系図書・研究報委員会 編 (38). pp.1-10.

- ・(社) 日本フォークダンス連盟 (2001) すぐに踊れるフォークダンス. 成美堂出版.
- ・白石雅紀 (2021) 多文化共生保育に関わる保育者養成の現状と課題—保育者養成校におけるシラバス調査より—. 未来の保育と教育: 東京未来大学保育・教職センター紀要 第7号. pp.69-92.
- ・ト田真一郎 (2012) 日本における多文化共生保育研究の動向. 大阪教育大学幼児教育研究室紀要: エデュケア33巻. pp.13-35.
- ・八桁健・八桁由布樹 (2019) 領域「表現」における日本の多文化幼児教育・保育の現状と課題. 中部学院大学・中部学院大学短期大学部. 教育実践研究第5巻. pp.73-80.
- ・山本尚史 (2016) 保育者養成における多文化保育についての一考察～長崎市における保育者の研修と行政の取り組みに着目して～. 長崎女子短期大学紀要40. pp.48-53.

